

第4号 ドンナイ省の新会社設立の申請書類

モノづくり中小企業ネットワーク計画(3)

ベトナム政府は、モノづくりの裾野産業育成に力を入れており、その柱として日本のモノづくり企業の誘致を強力に推進しています。その一貫として、日本の中小モノづくり企業がベトナムに新会社を設立する際の投資手続の簡素化も進めています。

ロンドウック工業団地のあるドンナイ省において、総投資資本が3000億ベトナムドン(約12億5000万円)未満の小規模投資の場合、フィージビリティスタディ(FS)の提出が不用になるなど申請書類が簡素化されています。海外からの投資に関する認可は、63の省と直轄市の人民委員会が行い、ドンナイ省における新会社設立の申請のためには、次のような書類の提出が義務づけられています。

- 1 投資許可証登録申請書
- 2 設立会社定款
- 3 親会社登記簿謄本
- 4 親会社定款
- 5 親会社財務諸表・監査報告書(2期分)
- 6 設立会社の法的代表者のパスポート
- 7 親会社の法的代表者のパスポート
- 8 土地予約契約書・建物リース契約書(工業団地運営会社で準備)
- 9 敷地図レイアウト(工業団地運営会社で準備)
- 10 銀行残高証明書
- 11 親会社取締役会決議書
- 12 Undertaking Correspondence(工業団地運営会社で準備)
- 13 生産フローチャート
- 14 生産設備機材リスト
- 15 親会社カンパニープロシヤー

上記書類は、基本的に日本語、英語、越語の3カ国語での提出になります。また、書類「3」「4」「5」「6」「7」「10」については、日本において公証役場、法務局、外務省での認証が必要になります。越語への翻訳については、トラブルを避けるためベトナム大使館や総領事館を通じた翻訳が無難なようです。書類「1」「2」については、各社で作成しなければなりません。記入用の雛形や必要項目リストが揃っていますので、それほど手間はかからないと思われれます。

これらの書類を揃えてドンナイ省の人民委員会または工業区管理委員会へ提出した場合、不備がなければ15営業日以内に投資許可証が発行されることになっています。人民委員会への実際の書類提出及びやり取りについては、ロンドウック工業団地の場合、工業団地運営会社が全面的に協力してくれます。

<参考>

ベトナム大使館： 東京都渋谷区元代々木町50-11
TEL 03-3466-3311

在大阪ベトナム総領事館： 大阪府堺市市之町
4-2-15

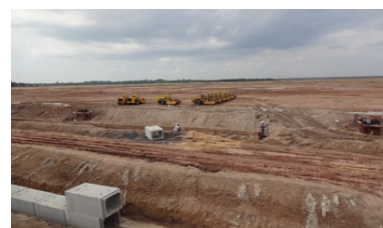
TEL 072-221-6666

在福岡ベトナム総領事館： 福岡県福岡市博多区
中州5-3-8 アクア博多4F
TEL 092-263-6778

当然のことですが、上記したような新会社設立のための申請書類の作成、提出以外にも、ベトナムでの生産開始までには、次のような手続が必要になります。

- 1 環境許可申請書作成・認可取得
- 2 公印作成・登録・印鑑証明
- 3 銀行口座開設・資本金振込
- 4 税務登録・Tax Code受領
- 5 現地社員採用
- 6 現地社員用社会保険、健康保険登録
- 7 輸入生産設備リスト、輸入減材料・部品リスト、輸出
- 8 製品リストの登録(輸入開始1ヶ月前)
- 9 会社設立新聞公告(設立日より1ヶ月以内に3日間)
- 10 就業規則、賃金テーブルの登録
 - 11 マルチビザ申請
 - 12 労働許可証(DIZA)取得
 - 13 住民登録証取得(在住管轄公安)
 - 14 在留許可証取得(イミグレ)
 - 15 在留届け(在ホーチミン総領事館)
 - 16 工業団地との契約
 - 17 生産設備調達、輸送、内装、据付工事

ヌケ、モレなく順番に処理していけば難しい手続ではありませんが、相応の時間を要します。レンタル工場への進出という条件でも、最低限生産の6ヶ月前には準備を開始する必要があります。ザサポートと致しましても、進出される個々企業の事情を勘案しながら、スムーズな準備、手続の実現に向けて支援体制を整備してまいります。



現在造成中のロンドウック工業団地

ベトナムという国について(4)

ホーチミンとベトナム

国際人としてのホーチミン

1960年代から1970年代前半にかけてベトナム戦争は、日本においても毎日のニュースのトップ項目でした。ニュース映像に登場するアメリカ大統領リンドン・ジョンソンやリチャード・ニクソンの指導者らしい恰幅の良さと比べて、あご髭を生やし痩せたベトナムの指導者ホーチミンは、いかにも貧相に見えました。ところが勝利したのは、貧相なホーチミンのベトナム。大国アメリカをアジアの小さな国ベトナムが撃破したと伝える衝撃的なニュースを、昨日のこのようにはっきりと憶えています。

ホーチミン(胡志明)は、1890年ベトナム中部高原地帯のゲアン省で生まれました。本名はグエン・シン・クン(阮生恭)。中部高原地帯は、夏はチュオンソン山脈から吹き下ろすフェーン現象で暑さが厳しく、台風シーズンには山岳に沿って流れる河川が氾濫し洪水が頻発し、冬は冷え込む、というように過酷な自然との戦いが必要な地域です。自然環境が厳しいからでしょうか、多くの政治指導者や革命家が中部高原地帯出身だとされています。ホーチミンもまた、生まれた自然環境が戦いへの能力を養ってくれたのかもしれない。

フランスの植民地下で少年時代を過ごしたホーチミンは、フランスに対する反感を胸に抱きながら、家計を助けるため21歳の時、ベトナムーマルセイユ航路のフランス商船のコック見習いとしてベトナムの地を離れます。その後30年間、フランス、ロシア、中国、アメリカなどで過ごすことになります。さしたる後ろ盾もない海外生活で苦労を重ね、実践の中で英語、仏語、露語、中国語を理解できるようになります。当時のアジア人としてホーチミンは、海外経験豊富でグローバルな視野を持った稀な国際人であったと考えることができます。

ホーチミンの海外生活は謎だらけです。フランスと中国で結婚し子供を授かったという伝記もありますが定かではありません。ベトナム共産党の公式見解では、生涯独身を過ごしたことになっています。確実にわかっていることは、1919年、第1次世界大戦のベルサイユ講和会議で、ベトナム解放に関する嘆願書を提出し読み上げたこと。その後、フランス社会党、共産党及びコミンテルンに参加。1930年にベトナム共産党を結党したことです。海外生活を通してホーチミンは、憎きフランスからベトナムを解放するための切り札としてマルクス・レーニン主義を選択していくことになりました。

ベトナム共産党結党以後1941年にベトナムへ戻るまで、ホーチミンは、グエン・アイ・クオック(阮愛国)という名前を好んで使っていたようです。漢字を見ればわかるように、ベトナム国を愛する者という意味です。革命に参加する人は、家族への弾圧を回避するため偽名を使うのが普通で、ホーチミンも数多くの名前を使い分けていたと推測されます。ホーチミン(胡志明)という名前は、1942年に中国へ潜入する際、中国人になりすますための偽名です。その後1944年には、

ホーチミンの名で、ベトナムに進駐していた日本軍に対する一斉蜂起を指令し、日本の降伏を見極めた上で1945年にベトナム独立宣言を発表しています。

戦争の中でホーチミンは、国際感覚をいかに発揮します。ベトナムに進駐した日本軍への反抗は、日本の戦況の悪化に関する情報を十分に分析した上で、タイミング良く一斉蜂起し、一気に独立宣言まで行っています。また、ベトナム戦争では、ソ連始め社会主義陣営からの支援を逸早く取り付けながら、最初はアメリカの攻撃に無抵抗を決め込み、その惨状を。マスコミを通して世界各国へ発信し同情を喚起した上で、反抗を開始しました。単に眼前の敵に立ち向かうのではなく、国際人として情勢を見極める目を活かし、絶妙なタイミングで行動起こすことにより、まさに蟻が巨像を倒すことを可能にしたのです。



ホーチミンが住んでいた家(ハノイ)

思想家としてのホー・チ・ミン

ベトナム共産党は、1991年の第7回共産党大会で「ホーチミン思想」を、党の思想的根拠とすることを決めています。ベトナム共産党の思想に関する公式的見解は「マルクス・レーニン主義の創造的適用」となっています。しかしながらホー・チ・ミンは、同時代のレーニンが「国家と革命」や毛沢東が「実践論」といった著作を残したのとは違い、思想をまとめた著作や論文を残していません。したがって、「ホーチミン思想」を知るには、ホー・チ・ミンの生き方をなぞりながら、その思想基盤を探るしか方法はないのです。

先にも述べたように、ホー・チ・ミンは30年間祖国を離れ外国で暮らしています。しかし、祖国ベトナムへの愛国心を忘れることなく、フランス帝国主義に対して怒りの炎を燃やし続けた人です。換言すると、ベトナム民族の解放が彼の使命であり望みだったのです。共産党革命に共感しコミンテルンで活動していますが、究極の目的であるベトナム民族の解放をぶれることなく追い続けました。恣意的に彼の思いを代弁すると、マルクス・レーニン主義に基づいてベトナム革命を遂行しようと考えたのではなく、マルクス・レーニン主義を手段とし有効活用してベトナム民族の解放を達成しようと考えたのではないのでしょうか。

1945年の独立宣言でホー・チ・ミンは、次のように述べています。「地球上のすべての民族は生まれながらに平等であり、生存する権利、幸福かつ自由である権利を持つ」「すべての人は自由かつ権利において平等な者として出生し、生存する」「フランス人は逃げ去り、日本人は降伏し、バオダイ帝は退位した。わが人民はほぼ1世紀にわたって彼らをつないできた鎖を断ち切って祖国のために独立を勝ち取った。わが人民は同時に10世紀にわたって君臨してきた君主制を打倒し、それにかわって現在の民主共和国を樹立した」。そして、自国を「ベトナム民主共和国」と名乗りました。

独立宣言の中には、共産主義革命でお馴染みの「革命の成就」「階級闘争における勝利」という言葉は出てきません。むしろ、独立、平等、幸福や自由の追求といった言葉が並びます。フランス革命やアメリカの独立宣言を思い起こさせます。ホー・チ・ミンの思い描いていた理想的な社会は、社会主義というよりも自主独立した共和国であり、民主主義国家であったのであろうという推測が成り立ちます。またホー・チ・ミンの国民への情報発信は、常にベトナムの伝統的詩を使った平易な言葉による語りかけでした。教条主義的な訴えかけはしていません。さらに、独立宣言の為された1945年に、漢字とチュノムの使用を禁止し、アルファベットで綴るクオックグーをベトナム語に制定しました。恐らく国民一人ひとりが、自由や幸福を追求するための最低条件である読み書きの習得を促進するための政策だったのでしょう。しかし残念ながらホー・チ・ミンは、ベトナム戦争の最中である1969年に亡くなります。彼のめざした理想的な国づくりは道半ばにして頓挫したのです。

ホー・チ・ミンの死後、ベトナム共産党が彼の意志を継いでベトナム戦争を引き継ぎます。ベトナム戦争は東西冷戦の影響を強く受け、ソ連とアメリカの代理戦争という色彩も濃くなっていきました。こうした状況の中ベトナム共産党は、ホー・チ・ミン思想との乖離を理解し

ながらも、ソ連への傾斜を強め社会主義へ傾倒していきます。1975年のサイゴン陥落によるベトナム戦争の勝利で、さらに政治的基盤を強固にし、一党独裁体制を確かなものにしていきました。基本的にベトナム共産党による一党独裁体制は現在も続いています。

とはいえベトナム共産党は、階級闘争至上主義で政治を行ってはいません。ベトナムの伝統的な文化や風俗を一貫して尊重しています。宗教に対してもおおらかです。中国とは違い土地の利用や所有も容認しています。さらに1986年のドイモイ政策導入以降は、積極的に資本主義的政策を取り入れています。ベトナム共産党の政策決定には、ホー・チ・ミンがめざした独立、平等、幸福や自由の追求を意識した微かな足跡が見えます。

ホーチミン廟や博物館などには必ず「独立と自由ほど尊いものはない」というホー・チ・ミンの言葉が掲げられています。また、ベトナムのすべての紙幣には、あご髭を生やし痩せた笑顔のホー・チ・ミンが印刷されています。ホーチミン思想は、こうした営みを通してベトナム社会の中で継承されていくのかもしれない。



ホーチミン廟(ハノイ)

象徴としてのホー・チ・ミン

ホー・チ・ミンは、ベトナム民族の解放の先に、先駆者であるフランスやアメリカが成し遂げた自主独立の共和国や民主主義国家を夢見ていました。ところが歴史は皮肉です。1941年に帰国以降、民族の解放を勝ち取るために、フランスやアメリカと長く厳しい戦争をする巡り合わせが待っていました。想像するに、彼の中には複雑な思いが去来していたに違いありません。

ベトナム民族の解放は、ベトナムの人びとの貧しさからの解放でした。ホー・チ・ミンは、貧しさからの脱出のためにはまずベトナムの独立と自由を勝ち取ることの必要性を説き、人びとの団結と愛国心の喚起を促しました。そして、人びとの団結心と愛国心から生まれる熱情を戦争遂行のエネルギーへ昇華させていったのです。彼の指導なくしてフランスとアメリカとの戦争での勝利はなかったはずで、彼は、戦争の英雄であり、ベトナムの独立と自由の父でもあります。しかし、ホー・チ・ミンは決して英雄になることを望んではいませんでした。

ホー・チ・ミンは遺書の中で、次のように書き記しています。

「私の遺体を火葬にして、灰を三つに分け、北部、中部、南部の人たちのために、それぞれの丘陵に埋めてほしい」「丘陵には石碑、銅像を建てず、訪れた人が休むことができるよう、簡素で、広く、堅固で、涼しい建物を建て、丘陵の上に植樹の計画を立ててほしい。訪れた人が記念に木を一本植える。日がたてば、森林となり、景色もよくなり、農業にも役立つだろう。管理は古老たちに委ねてほしい」と。遺書には神格化を嫌う彼の信条が綴られています。しかしながら現在、彼の銅像は国中に立ち並び、ハノイのホーチミン廟には、蠟加工された彼自身が生前の姿のまま眠っています。なぜホー・チ・ミンの意志に反して、彼は英雄として祭り上げられたことになったのでしょうか。

理由は2つあります。第1は、ベトナム共産党が、かつてのインドシナ、ベトナム戦争中に実現された国民の団結心と愛国心の高揚、そしてそこから生まれる熱情とエネルギーを、再度新たな豊かさの獲得、つまり、経済成長に結びつけたいという意図を持っていることです。そのためには、指導者ホー・チ・ミンという名は不可欠。彼は引き続き英雄でなければならないのです。

第2の理由は、1930年の結党以来ベトナム共産党を先導してきたホー・チ・ミンの存在なくして、現在の「ベトナム社会主義共和国」(社会主義国家)の正当化及びベトナム共産党の永続化を保証するものは他にないからです。ベトナム戦争終結後すぐに、南ベトナムの首都サイゴン(現ホーチミン市)をホーチミン市と変更したのは、ベトナム共産党の意向が明白に現れている好例です。

今やホー・チ・ミンは、国民から人気のある「ホーおじさん」(バック・ホー Bac Ho)であり、建国の英雄です。同時に、ベトナム共産党のシンボルマークにもなっています。穿った見方をすると、ホー・チ・ミンというシンボルなくして、ベトナムの経済成長もベトナム共産党の存続も難しいということです。

外国人にはうかがいしれませんが、公安当局は大きな権限を持っており、政治思想に関しての取り締りは厳しく行われ、社会主義特有の思想弾圧は潜行しながら

横行していると思われます。しかしながら一方で、ベトナムはASEANやWTOに加盟し、TPP(環太平洋経済協定)への積極的参加を表明しています。越僑の影響力も増えています。ものや人の流れは質量共に大きくなり、海外の情報も自由に国民が入手できる状況が訪れています。

心あるベトナム人は、共産党の一党独裁から多党化による民主的な政治を望み出しています。近い将来、経済成長が順調に進み、新たな豊かさ獲得が実感されれば、ホー・チ・ミンのシンボルマークとしての威力は徐々に減衰していくのかもしれませんが、将来ホーチミン市が旧名のサイゴンに戻る日が来るかもしれません。恐らくその日が、ホー・チ・ミンが夢に見た民主主義国家としてのベトナム誕生の記念日になるのではないのでしょうか。



博物館のホーチミン像